

安心して利用できる 公共交通の強化を

倉敷市・清心中2年 平松 夢さん

この記事を読んで、ハッとしました。私も自分のせいで、家族に送迎人生を送らせてしまっているからだ。

私は幼い頃から、通学をはじめ塾や習い事など全てを家族の送迎に頼っている。両親は共働きのため、送迎が難しい時間帯は全て祖父母が送迎している。しかし、定年退職後はそれまで出来なかったことに挑戦して、自由を謳歌したいと言っていた祖父母だが、現実には孫の送迎に日々追われている。どこかに出掛けても、送迎の時間を気にして少し早めに帰ってくることも多く、時間を気にせず楽しむことは難しい。今の生活の中心にあるのは孫の送迎であり、祖父母は孫のためだと言いながら、自分の時間を犠牲にしている。私は送迎される側とする側の人達に送迎について意見を聞いた。すると、毎日家族の送迎に頼る人、頼られている人の多さに驚いた。理由は様々だが、公共交通がない以外にも、車での送迎に比べて公共交通は時間も費用もかかりすぎるとの声もあった。多くの人から車での送迎は「仕方がない」当たり前だ、とこの声がある一方、送迎する側の気持ちを考えている人は少なかった。

では、どうすれば送迎の負担を減らせるのか。私が住む早島町は住みこちランキング五年連続一位で、県内で唯一の自立持続可能性自治体となった。しかし、公共交通に目を向けてみると、無料で町内を回るコミュニティバスが導入されてはいるが、電車の時間

に合わせた一日十便程の運行のため、利用者は限定的だ。また、通学以外の塾や習い事で使用したいと思っても、夜遅くは運行されていないため、家族に送迎をお願いしなければならぬ。

子供でも安心して利用できる公共交通を強化することで、家族の送迎の負担は減るだけでなく、子育て支援の一つになると思う。誰もが安心して行きたい所に行ける社会にするためには、その地域に住む私達住民が声をあげるしかない。十年後、二十年後を見据えて、皆で地域を変えなければならぬのだ。

送迎は孫に拘束されている時間だが、孫との会話が毎日の楽しみだと嬉しそうに話す祖父母。しかし、高齢の祖父母に「ありがとう」という言葉を伝えながらも、いつまで甘えられるかという不安な気持ちもある私は、互いに顔を見ながら、ゆっくり会話が楽しめる日常にするため、公共交通の強化の必要性を強く訴えていかなければならないと考えている。

寸評

「送迎人生」についての記事を読み、送

迎に携わる家族の負担はもちろん、気付きにくい地域課題を自分事として捉えました。解決に向け、皆で地域を変えようと、公共交通の強化の必要性を強く訴えています。

滴一滴

「送迎人生」という言葉を最近知った。マイカーで、子どもの通学や塾通い、パートナーの通勤、親の通院といった送迎を過度に一人が担う大変さを表しているとい

う。多かれ少なかれ、移動の一部を送迎に頼っている話によく聞く▼土井勉・一般社団法人グローバル交流推進機構理事長らの近畿圏での実態分析では、送迎を担うのは7対3で女性が多い。お母さんが家族の移動を支える姿が思い浮かぶ▼都心、郊外、地方と公共交通が不便になる順に送迎の割合が増える。送迎する側は自分の時間を犠牲にし、就業の機会も失われる。すると次世代などがそこに住む選択をしにくくなる、と指摘している▼その改善に役立った好事例がある。瀬戸内市は2022年、民間バスが運行していた二つの路線を市営バスに転換した。便数や運行時間帯はほぼ引き継ぎ、運賃は1乗車が100円などと格安にした▼すると利用者数は1・5倍と2・8倍に増えた。その大きな要因が通学定期の利用増で2・3倍にもなった。定期代が半年間で1万800円などと大幅に下がり、送迎からバス利用に変わったケースが多いとみられる▼入学や就職、転勤の時季を迎えた。これから送迎を始める人もいるだろう。公共交通が使いやすくなって、送迎人生が軽減される。気付きにくいのが、地域の重要な課題だ。